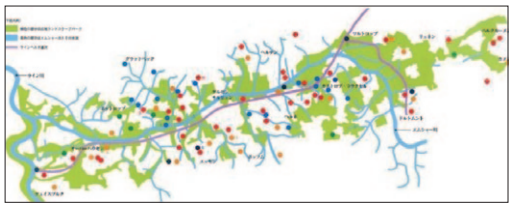


# 一第30編一 エムシャーパーク、IBA方式による近代ドイツの地域再生<sup>\*1</sup>

ドイツの戦後は民主主義的社会理念のもとで、過去の克服に多大な時と労力が費やされた。建築やまちづくりのテーマも地域性や歴史性と関連させて自由に語れるようになるには、大きな国際コンペや建築展が開催された1970年代半ばあたりまで待たなければならなかった。特にフランスとともに欧州経済共同体に生きる道を見いだしたドイツは、敗戦国として「軍事」に依拠しない別の道での貢献の選択が迫られた。それが「経済」であり、「環境」であった。

北国の特徴が凌駕するドイツでは、心地よい生活環境作りの人々の関心は向かう。戦後の経済成長はそうした身近な環境への投資を可能にした。そして、国是としての環境へのまなざしはそこから地域や地球規模の環境問題に広がっていく。70年代の緑の党の運動が拡大するにつれ政治・政策的な課題に発展するが、その背後には長年の草の根的な動きを経て70年代オイルショック以降活発化した、「建築生物学（バウビオロギ）<sup>\*3</sup>」を代表とするエコロジカルな住まい・まち作りの思想や方法論の展開があった。

各地の自治体は建築や都市計画を縦割りに規制するだけでなく、その間の空間を連続



図版30-1 IBA エムシャーパーク全域図

<sup>\*1</sup> Emscherpark: エムシャー川流域の地域再生プロジェクト

<sup>\*2</sup> Internationale Bauausstellung (IBA): 国際建築展

<sup>\*3</sup> Bauökologie: 建築学と生物学を統合したエコロジカルな概念

的に豊かにするために様々な仕組みや制度を開発した。広域の風致景観（ランドシヤフト・プランニング<sup>\*4</sup>）や街区単位の詳細なルール形成（B-プラン<sup>\*5</sup>）など、長年にわたってまちづくりに貢献できる人材を活用しながら、市民に開かれた環境形成を図る手法などは、成熟した市民社会の大きな成果である。

このような「環境」に視座を置いたまち作りの事例には事欠かないドイツだが、近年ではルール地方の「IBAエムシャーパーク」の広域的な地域再生の試みこそ、何をさておき特筆すべきである。大小を含め2000を超えるプロジェクトが同時進行した前代未聞の試みは、20世紀型の重工業都市群と荒廃した後背地を環境と情報の21世紀型につくりかえようとするものだが、その際20世紀を支えた生産施設群を保全再生し、記憶として残しながら新たな生活環境を整える極めて先進的な方法がとられた。そのイニシアチブをとったのが「IBA（国際建築展）」という名を冠した時限の株式会社（1991―2000）だった。前例であるベルリンでの壮大な都市再生も含め、ここに見られる数々の試みには、成熟したまちづくりの理念と手法として学ぶことが多い。

こうして、「IBAエムシャー・パーク」は、時代の記憶と負の遺産をそのまま伝えるだけでなく、膨大な知恵と作業と資金を結集した地域再生の試みを通して、現在の私たちのルーティンなまちづくりや地域づくりの営みに激しく警鐘を打ち鳴らしている。そして、なによりもそこから私たちに迫りくるのは、次代に照準を据えた視野の広さと強固な意思の力である。



写真 30-1 マイデリッヒ精練所跡地の野外劇場

<sup>\*4</sup> Landschaftplanung

<sup>\*5</sup> Bebauungsplan (通称B-Plan): 日本の都市計画法には1980年に「地区計画」として導入された